

# 広見短歌会

鉢植えの小さき山茶花吾の背を越えて明るく庭を賑わす

佐々木登美子

星々の間をぬける「はやぶさ」続いて「あかつき」復活を果す

武田 幸子

病室で書きし我が歌代筆し友はアララギに送り給へり

蛭谷 寿子

灼熱の真夏に耐へて葉ぼたんは今植へ替えの雨を待ちおり

西添 春子

友のくれし忘な草は池の辺に秋海道も咲きこぼれおり

山本まつる

小春日に夫と語りて縁側に健やかに過ぐ五十余年

兵田トミ子

沖繩の四人に一人命絶え七十年の叫びとどかず

二宮 安恵

すたすたと歩いてみたいと夫云ひし逝きて十年偲びて歩む

高田 治子

秋長く春咲くはずの椿咲き片も青みて摘み菜葉ししむ

芝 幸子

強くなれ人の噂も聞きなれて凜と生きたや残された日々を

伊手リツエ

笑い皺も老いの勲章自慢する

宮岡 沙代

姑が居ないと嫁がよく笑う

都 瞳

ヘッドホーン付けて笑いを一人占め

宮川 柳酔

終活へ恋の一字も入れておく

渡辺 光男

保証期間終ると故障する家電

合田 悦子

定年を有終の美で飾れたか

武田 浅美

覚えのないにこにこ顔をかわせない

宇都宮 孝

歳をとるこれ程辛いことはない

金子すすむ

集団の怖さは鳩を鷹にする

西原 淳子

代替わりして故郷が遠くなり

栗木 一郎

噂ばなし重ね着をしてひとまわり

加藤 桂子

始まりは鼻風邪だった手術台

財前 溪子

四コマでけりはついたか隣の灯

森本 幸美

人生は造花で居たい時もある

宇都宮 忍

## きほく川柳会

### 鬼北の足跡を辿る…【等妙寺編 第6回】

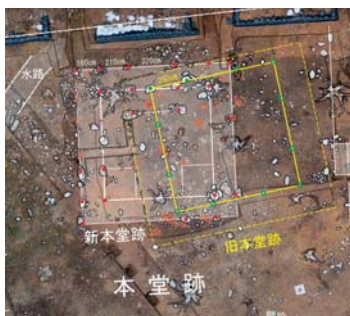
#### 中世の等妙寺の姿⑤

本堂とは御本尊を祀った仏堂のことで、仏殿とも呼ばれます。堂内の中央部に須弥壇（しゆみだん）、その上に厨子（ずし）を置き、中に本尊仏が安置され、全体のなかで最も重要な場所とされます。この中央部のことを内陣（ないじん）と呼びますが、これに対して一般の参詣客が座る場を外陣（げじん）といいます。本堂は、内陣のみを基本とする堂でしたが、平安・鎌倉と時代が下るにつれ、仏教の世俗化が進むなかで外陣が加わっていきます。

さて、旧等妙寺の本堂は、天正16年（1588）の火災で焼失した新本堂と、その前段階の2時期あることが確認できました。新本堂は、今のところ、16世紀代に建てられたものと考えています。これが現等妙寺にある観音堂（宝暦5年（1755）再建）とほぼ同じで、唐様（禅宗様）三間堂です。旧本堂は、和様もしくは唐様の三間堂です。旧本堂がいつ建てられたのかは定かではありませんが、少なくとも等妙寺が開山されて以降、一貫して本堂は内陣のみの三

間堂を採用していること、また、現等妙寺観音堂に見るように、その様式を後世まで継承していることがうかがわれます。

日本の建築史上では、鎌倉から室町にかけて、礼拝用のスペースである外陣を持たない本堂はほぼ皆無と考えられてきました。寺院規模等から類推して、旧等妙寺の本堂も五間堂ないしは七間堂だろうという大方の予想とは一致せず、古い伝統様式を幾世代も守り続けた寺院の姿が垣間見える結果でした。また、南予地域には室町から江戸時代にかけて唐様の三間堂が広く遺されていることも注目されていました。その伝統文化の発信源こそ、まさに等妙寺であったと考えられるのです。



発掘調査で確認された本堂跡